

第 216 回 赤坂の石垣隈太郎像とペルー大使館のミゲル・グラウ・セミナリオ像

筆者：林 久治（記載：2023 年 1 月 14 日）

（1）前書き

私（筆者の林）は [Random Walks（乱歩）](#) という題名で [偏屈老人（林久治）の気促な紀行文](#) のサイトを始めている。私の紀行文では、通常の紀行文にはない、斜め目線からのご紹介を書くことに拘りたいと思います。通常の紀行文に関しては、既に優れたサイトが沢山ありますので、それらをも引用しつつ、ユニークなご紹介を記載することに心掛ける所存です。

一方、私は日本の銅像探偵団 ([1\) のサイト/](#)) の銅像探索に参加している。私は珍しい銅像を探して、探偵団の団長さんに「ギャフン！」と仰っていただけることを目標としている。ここで「珍しい」とは、「①見つけ難い場所に隠れている有名人の銅像。②市井で頑張って人生を過ごしたが、有名人ではない人物の銅像」と言う意味である。私は自宅が東京にあり、孫達が大阪にいたので、主として東京近郊と近畿地方で銅像探索を行っている。最近、私はネット記事を丹念に調査し、そのような「スクープ銅像」の候補を多数見つけている。

武漢肺炎による自粛生活で家に籠っていると、運動不足で体重が増加するし、精神的にも圧迫を感じる。私の銅像探索は不要不急の活動ではなく、私の生存に必要な不可欠である。図 1 には、2022 年の国内の感染者数と死者数の変遷を示す。

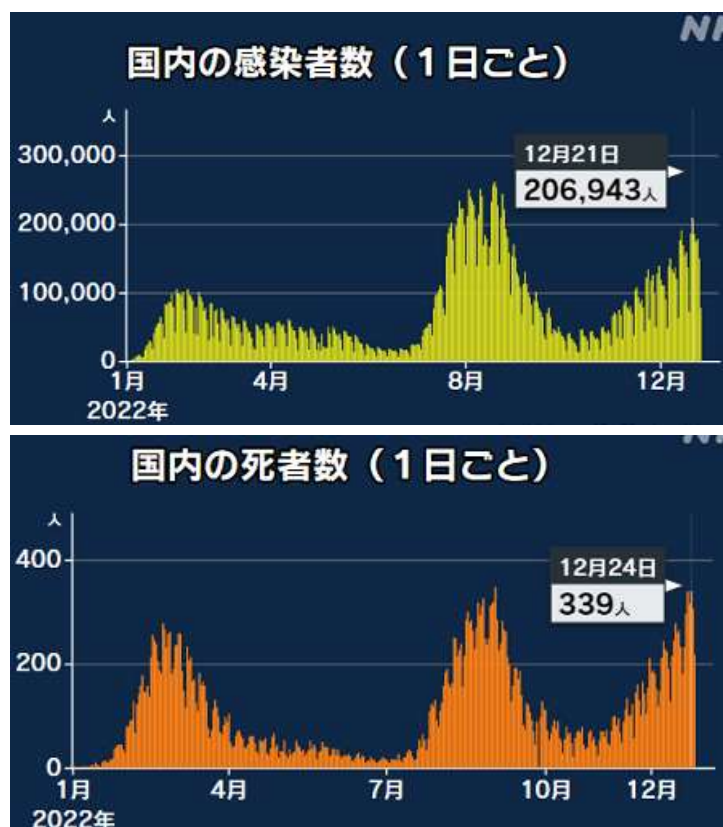


図 1.

上：2022 年の国内感染者数、

下：2022 年の国内死者数、
本図は、[3\) のサイト/1](#) より借用。

昨年の 7 月は、第 7 波と猛暑のため、私は銅像探索をしばらく自粛していた。しかし、大阪在住の 3 人の孫達は夏休み前に感染したが軽症であった。そこで、私は 9 月初旬に大阪に行き、近畿の銅像を探索した。東京に帰ってからも、運動を兼ねて銅像探索を続けている。私の銅像探索記の全ては、[2\) のサイト/f](#) から閲覧出来ます。

1月4日に、私は愛宕山に登り、後藤新平像と江下武二像を探索した。[前回の記事/f](#)ではこれらの銅像を紹介した1月4日には、私は愛宕山の近くにある三会堂ビルの石垣隈太郎像を探索した。また1月13日には、私は渋谷区広尾のペルー大使館前にあるミゲル・グラウ・セミノリオ像を探索した。両像は[1\) のサイト/](#)に収録されていない。本稿は、両像の探索記で、私の意見などを[青文字](#)で、資料の内容などを[緑文字](#)で記載する。

(2) 東京都港区赤坂の石垣隈太郎像



図2.
上：三会堂ビル
(緑色の矢印)
の周辺地図、
本図は、[3\) の
サイト/8](#)より
借用。
下：三会堂ビル
の全容。

図2上に三会堂ビルの周辺地図を、図2下には本ビルの全容を示す。本ビルは立派な建物であるが、近々再開発のために解体されるそうである。本ビルに入れるかどうかは不明であったが、「出来れば解体前に石垣像を探索したい」と思った。

私は愛宕山から本ビルまで歩いて行った。約15分の行程であった。図3上には、本ビルの玄関を示す。本ビルは多くの団体や飲食店が入居しているので、私は1階ホールは通行自由だろうと思っていた。本ビルに入ってみると、すぐ目の前に1基の銅像が設置されていた。その写真を、図3下に示す。



図3.
上：三会堂ビルの玄関、
下：1階ホールの銅像。

1階ホールは私の予想通りに通行自由で、少数の通行人があった。しかし、ホールには守衛らしい人物が立っていたので、私は彼に撮影許可を求めた。彼は一瞬の躊躇後、「いいですよ」と言ってくれた。本像の写真を次ページの図4に示す。本像の台座側面と左横には、石垣氏の経歴が貼付されていた。しかし、それらは少し解読困難であった。本像の左横には、大きな板の掲示板があった。



図4.

左：石垣像の全身、
右：石垣像のお顔部分。



石垣像の全身像を図4左に、お顔の部分を図4右に示す。本像の台座正面には題字があり、それには「石垣隈太郎翁之像」とあった。また、本像背面には朝倉文夫先生の独特の署名があった。

本像の左横にあった大きな板の掲示板を次ページの図5に示す。それには次のように書かれていた。

三会堂ビルと石垣隈太郎翁

明治十四年から明治四十五年にかけて、明治政府の殖産興業の方針の下、農林水産業の振興発展を目的として相次いで創設された大日本農会、大日本山林会、大日本水産会の「三会」は、明治十六年、京橋区木挽町に合同の事務所を設けました。

明治二十四年に至り、三会は、当地、赤坂溜池に移転し、合同の会堂を設け、明治三十一年にこの会堂を「三会堂」と命名しました。

その後、明治三十七年には、新たな会堂を建設しましたが、大正十二年の関東大震災により同会堂は灰燼に帰し、関係者一同その再建について途方に暮れるところとなりました。

大正十四年に至り、我が国北洋漁業の先覚者「石垣隈太郎」翁から当時の金額にして百万円相当の私財を、農林水産業をはじめとする産業の発展のために役立ててほしいとの申し出があり、この寄附により、大正十五年「財団法人石垣産業奨励会」が設立され、昭和二年、この地に当時としては珍しい鉄筋コンクリート六階建ての最新式ビルディング「三会堂ビル」が誕生しました。

その後、第二次大戦後の米軍によるビル接收解除を機に、昭和三十九年に財団法人石垣産業奨励会が財団法人農林水産奨励会に改組され、昭和四十二年に現在のビルが竣工し、今日に至っております。

なお、石垣隈太郎翁の名は、当ビル九階に「石垣記念ホール」として残されています。

〈像〉彫刻家「朝倉文夫」作



図5. 本像の左横にあった大きな掲示板

ウィキペディアには石垣翁の記載はない。しかし、[4\) のサイト/1](#)、[5\) のサイト](#)、[6\) のサイト](#)などに、三会堂ビルと石垣翁の紹介記事がある。

[4\) のサイト/1](#)：三会堂ビルの沿革、1Fに石垣翁の銅像（昭和2年 朝倉文夫 作）がある。

[5\) のサイト](#)：石垣翁の略歴。

[6\) のサイト](#)：三会堂ビルの概要。

以上の資料などにより、石垣像の概要は次の通りである。

石垣隈太郎立像

設置場所：東京都港区赤坂1-9-13 三会堂ビル1階ロビー

制作者：朝倉文夫

設置年：1927年

設置経緯：石垣隈太郎翁（1859-1928）は、伊勢の国大社村（三重県）生まれ、14歳で三菱会社（海運）の給仕から貨物輸出掛となり、西南戦争時には御用船に乗船、軍需品の輸送を担当、函館にて三菱から独立して食料品の販売や漁業経営、ラムネの製造にも着手する。帆船、汽船を10隻買入れ、海獣狩猟、アラスカからの魚の買い付けを経て、ロシア海域でのサケ・マス漁業に成功すると、サルベージや海運も営み、巨万の富を得、水産王と称される。輸出食料品会社、東洋製罐ほかの会社設立に関わり、重役、社長等歴任する。晩年は巨財を大日本水産会に寄付して石垣記念財団を設立せしめ、三会堂ビルの再建にあたらせた。函館の区会議員、商工会議員など務め、各種事業に私費を投じるなど、地方公事、産業振興に尽力した。

(3) ペルー大使館のミゲル・グラウ・セミナリオ大提督像



- ①：恵比寿駅西口
「日赤行」バス停
- ②：「広尾高校前」
バス停
- ③：ペルー大使館

図6. ペルー大使館の周辺地図、本図は、[7\) のサイト](#)/より借用。

図6にペルー大使館の周辺地図を示す。私は1月13日に、恵比寿駅西口から「日赤行」のバスに乗り（図6の①）、「広尾高校前」で降りると（図6の②）、本館に約10分で到着した（図6の③）。



図7. ペルー大使館前のミゲル・グラウ大提督像

ミゲル・グラウ像は、ペルー大使館前の道路に面して設置されていた。その写真を図7に示す。丁度、日本人男性がペルー国旗を掲揚していたが、彼は写真撮影している私に文句を言わなかった。



図8. 左：ミゲル・グラウ像の近接写真、右：グラウ大提督の肖像、本図は、[ウィキペディア](#)より借用。

図8左にはミゲル・グラウ像の近接写真を、図8右には彼の肖像を示す。本像の台座正面には題字が書かれていた。その写真を次ページの図9上に示す。その文字は、現在の新品状態でも読み難くかったので、将来は文字の風化が激しいのではなかろうか？これも、日本とペルーとの文化の違いであろう。

本像の周辺には、上記以外の資料は展示されていなかった。図9下には、本像の除幕式の写真を示す。本図は[8\)のサイト](#)に掲載されており、私は本サイトを偶々みて、本像の存在を知った次第である。[8\)のサイト](#)には、次のように書かれていた。

ペルー独立 197 周年に際し、ペルー海軍ミゲル・グラウ・セミナリオ大提督生誕 184 周年記念胸像除幕式が在日ペルー大使館で開かれました。2018 年 7 月 27 のこの式典では、多くの方々の前で、ペルー大使ハロルド・フォルサイトと防衛省情報本部長海将大塚海夫氏が除幕を行いました。



図 9. 上：本像台座正面の題字、下：本像除幕式の写真、本図は、[8）のサイト](#)より借用。

ミゲル・グラウ大提督のことは、日本では殆ど知られていない。ウィキペディアには、彼の経歴が詳しく紹介されている。それには次のように書かれている。

ミゲル・グラウ・セミノリオ（1834年7月27日 ペルー パイタ生 - 1879年10月8日 ボリビア プンタ・アンガモス没）は、太平洋戦争（1879-1884）で活躍したペルーの海軍士官。この名前はスペイン語圏の人名慣習に従って、第一姓（父方の姓）はグラウ、第二姓（母方の姓）はセミノリオである。彼はアンガモスの海戦で最後まで勇戦したことから同国では英雄として扱われている。敵兵を丁重に扱う騎士道精神に満ちた紳士的態度から el Caballero de los Mares（エル・カバレロ・デ・ロス・マーレス、スペイン語で「海の紳士」の意）と呼ばれ、ペルー人のみならず敵であったチリ人からも尊敬を集めている。ペルー海軍を象徴する人物であり、アメリカ大陸で最も有名な商船船長および海軍指揮官の一人とされる。最終階級は少将（ペルー海軍で最初の将官）。後にペルー議会から「ペルー大提督」を追贈された。

太平洋戦争（1879-1884）は、ペルー・ボリビア連合とチリとの間で硝石資源を巡って戦われた戦争であった。戦いは主に海戦で、劣勢であったペルー海軍を率いたのがグラウ少将であった。彼はアンガモスの海戦で戦死し、ペルーでは英雄として扱われている。日本で言えば、さしずめ「山本五十六元帥」であろう。なお、ペルー大使館周辺の紹介は、[9\) のサイト/a](#) が優れている。

以上の資料などにより、ミゲル・グラウ大提督像の概要は次の通りである。

ミゲル・グラウ・セミノリオ大提督胸像

設置場所：東京都渋谷区広尾 2-3-1 ペルー大使館正門前

制作者：不明

設置時期：2018年7月27日に除幕式 生誕184周年記念

設置経緯：ミゲル・グラウ・セミノリオ（Miguel Grau Seminario、1834年7月27日 - 1879年10月8日）はペルーのパイタ生れで、ボリビアのプンタ・アンガモスで没。太平洋戦争（1879-1884）で活躍したペルーの海軍士官で、アンガモスの海戦で最後まで勇戦し戦死したことから同国では英雄として扱われている。敵兵を丁重に扱う騎士道精神に満ちた紳士的態度から el Caballero de los Mares（エル・カバレロ・デ・ロス・マーレス、スペイン語で「海の紳士」の意）と呼ばれ、ペルー人のみならず敵であったチリ人からも尊敬を集めている。ペルー海軍を象徴する人物であり、アメリカ大陸で最も有名な商船船長および海軍指揮官の一人とされる。最終階級は少将（ペルー海軍で最初の将官）。後にペルー議会から「ペルー大提督」を追贈された。

参考資料

- 1) のサイト：<https://douzou.guidebook.jp/>
- 2) のサイト：<http://masaniwa.web.fc2.com/Ranpo.pdf>
- 3) のサイト：
<https://www.mapion.co.jp/m2/35.66981654,139.74417938,16/poi=21330107688>
- 4) のサイト：
http://www.affpf.org/newhomepage/home/nrss_gaiyou/nrss_enkaku/enkaku1.html
- 5) のサイト：[水産功績者（著名な水産功績者） | 大日本水産会 \(suisankai.or.jp\)](#)
- 6) のサイト：[三会堂ビル - Wikiwand](#)

7) のサイト :

https://www.mapion.co.jp/phonebook/M14007/13113/ILSP0000654102_ipclm/

8) のサイト : [ペルー海軍ミゲル・グラウ・セリナリオ大提督 胸像除幕式... | By Embajada del Perú en Japón - 在日ペルー大使館 | Facebook](#)

9) のサイト :

<https://blog.goo.ne.jp/ikagenki/e/9b3d568e3d2f1a00bc025dbc399f7e7a>